



七夕に天の川が決壊、対応急ぐ

七月七日未明、天の川の決壊により流星群が発生した。近年、織姫と彦星の逢瀬に多くの見物客が押し寄せていたにもかかわらず十分な対策を講じなかったとして、問題を放置した天上河川土木課に批判が集中している。

ただ、悪いことばかりではなかったようだ。精霊界では日照り続きで不作に悩まされており、季節外れの流星群がかれの食料難を補うこととなった。新鮮な星は噛み応えこそ軽いが熱くジューシー、滋養も霊力も豊富なため、急場の

補給には好適である。偶然とはいえ食糧危機を脱したことで、水の大精霊・ルリアスは「必要以上に土木課を責めないように」と公式に声明した。元はといえば野次馬にメディアが加担したために発生した災害。正すべきものは正しつつ自らを律する、公平な姿勢が求められている。

なお、天の川の護岸が復旧し明るさを取り戻すには一ヶ月ほどかかる見込みだ。



↑決壊直後の天の川（撮影：キリアン・プロコフィエフ）

大量の茄子、どう食べる？

「パンが無いならお菓子を食べればいいじゃん」

マリー・アントワネットが本当にそう言ったかはさておき、困窮する市民の感情を逆撫でしたことで有名な台詞である。

一方で、不足している食材を別のもので補い、新たなメニューを生み出すわざは家計のやりくりの一環として重宝される。たとえば松橋雅鷹さん（88）は、同居人の沢村一穂さん（89）の発想力には毎度驚かされると語る。

なぜか大量の茄子に縁がある松橋さん。傷む前に食べきってしまいたいのが、野菜の気分じゃない時だってある。ラーメンが食べたい。

その要望に、同居人は見事に応えた。

皮をそのままに縦に細く割った茄子は、くたくたになっても切れにくい。油でしつかり炒めた茄子を、豆乳や鶏ガラスープ、ラー油や香辛料も加えたタレと合わせれば、ヘルシーかつスパイシーな油そばの出来上がり。加熱した茄子は嵩が減るため、大量消費にもってこいだ。

「すっかり胃袋を掴まれていますね」と何気なく声を掛けたところ、松橋さんは複雑そうに顔をしかめた。不本意ながらうまいものにはあらがえぬ、われら食道楽のさがを垣間見た。



魅惑の謎

銀杏堂書店では、「夜がきた」はご馳走の合言葉だ。シフトに入っているスタッフはそれぞれ、出勤前の者にも連絡を入れる。あちら側はどうやら丸い星ではないようだし、だから夜もたまにしかやってこない。夜間に煌々と浮かび上がる幻の味。期間限定の謳い文句に弱いのは古今東西共通のようで、獣人から鬼、姿の見えないもののまでが異界の夜を心待ちにしている。

異界と人間界のあいだで門番を担う銀杏堂の行きつけは「窮鼠食堂」だ。言わずもがな鼠の店主が切り盛りしており、客の予算に

じてお任せで料理を提供する、いわゆる頑固親父スタイルの店である。繊細な香辛料の配合は自慢の鼻と舌のなせるわざ、材料の多くが正体不明なのは好みの分かれるところだろうが、この店の魅力に取り憑かれた者は口を揃えて「少し経つと無性に食べたくなる」と言う。

水晶眼で知られる銀杏堂特殊書店員・折原橋彦さん（88）もその一人で、「妖力や神通力なんかを強化するタイプの栄養が含まれているのでは」と分析する。なかなか興味深い意見だが、よくわからないのになんだか美味いのが外食のロマン。探るだけ野暮というものだろう。ゆえに正体不明を貫き続けてほしいと思うのは筆者のわがままだろうか。

うまいメシさえあればいい。
ふたりぐらしのごはんの話
なす
文庫判／168頁／600円

書店の地下から、不思議な世界へ
銀杏堂書店には裏の顔がある。いまは使われていない地下書庫の、奥深くの開かずの扉。一部の者しか通れないその先は、異界へ続いているという。
おとなしくしていても、あちら側はこちらに顔を出したくて仕方がないからさあ大変。普通のくらしを守るため、門番は今日も異界へ渡る。
銀杏堂異聞
文庫判／二六四頁／九〇〇円

漕ぎ出でよ、
暁の娘たち
権を握れ、目を開け。意志の炎が行く手を照らす。
Sail away, You ladies of the Dawn.
文庫判／172ページ／700円